

高校生の立場から考えるいじめ問題

香川県立高松高等学校 1年 岡野明莉

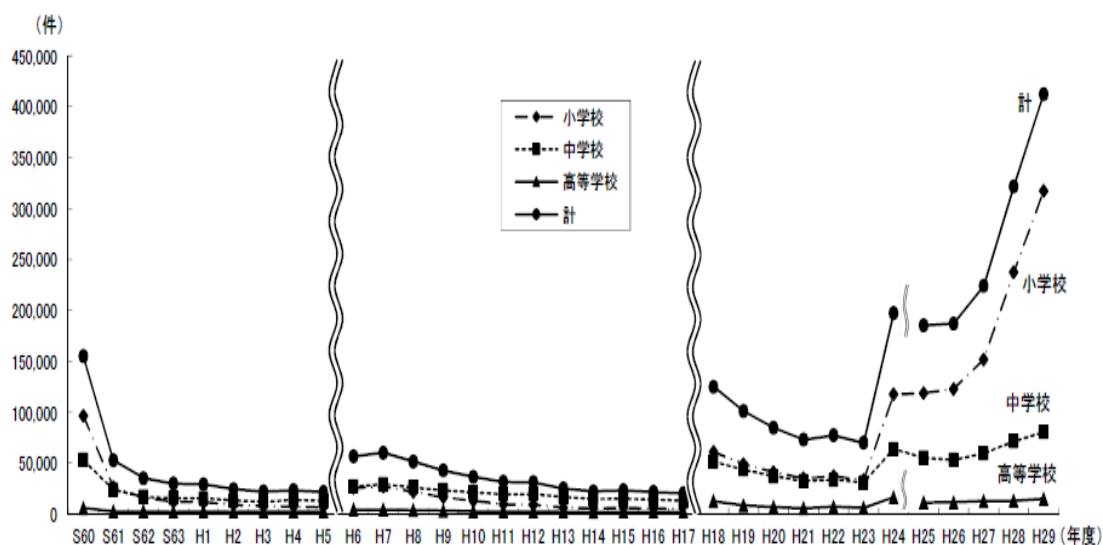
『子どもの権利』とは何か。1989年に国連で採択された『子どもの権利条約』第6条には、「1 締約国は、すべての児童が生命に対する固有の権利を有することを認める。2 締約国は、児童の生存及び発達を可能な最大限の範囲において確保する。」とある。つまり、当たり前のことだが、子どもは、生きる権利、成長する権利を保障されている。しかし、いじめで自殺をする子どものニュースをよく見る。子どもが、子どもの生きる権利を奪ういじめ。私は、いじめで苦しむ子どもを減らすために、加害者、傍観者、観衆、教師がどのような行動をとるべきか、いじめが起こりにくい環境づくりのために、生徒個人で、また集団全体でできることは何かを考えていきたいと思う。

1. いじめに関する基礎知識と現状

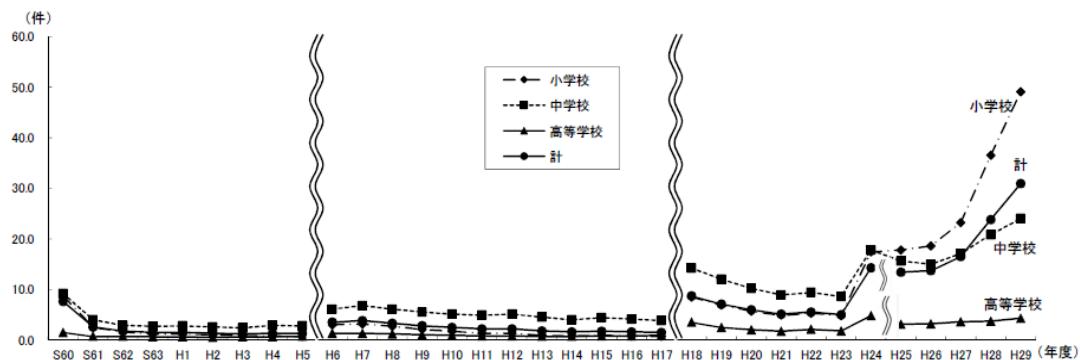
まず、平成25年に制定された『いじめ防止対策推進法』によって、いじめは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的または物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義されている。

つまり、加害者の意思に関係なく、被害者が傷ついているいじめなのだ。

<参考1> いじめの認知(発生)件数の推移



<参考2> いじめの認知(発生)率の推移(1,000人当たりの認知件数)



(出典：文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成 29 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について)

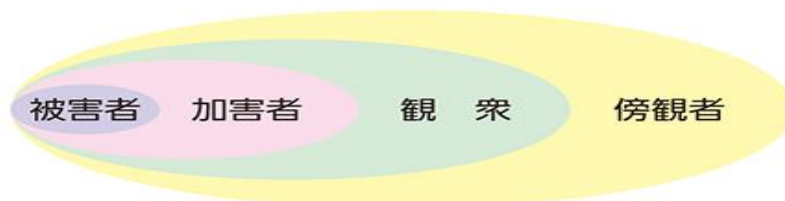
図<参考 1・参考 2>より、いじめは小学校で最も多く、年齢が上がると認知件数が減少し、認知率が低下することが分かる。この原因として、年齢が上がるにつれて、インターネット上のいじめなど、周りの人が気づきにくいいじめが増加すること、いじめが深刻化することなどを恐れていじめを報告しないことが多いことなどが考えられる。また、平成 25 年以降のいじめの大幅な認知件数の増加・認知率の上昇は、定義変更によるものと考えられる。

また、平成 29 年度の児童生徒の自殺は 250 人で、そのうち 10 人がいじめに遭っていた。自殺に追い込むほどのいじめが今も起きているということは深刻な問題である。今起きている深刻ないじめを解決し、いじめを受けてつらい思いをしている子どもに寄り添う必要がある。そして、いじめを受けて自殺する子どもがゼロになるようにしなければならない。

2. いじめが起こった時に何ができるか

- ① 「いじめの四層構造」の中にいる生徒ができること

図 いじめの四層構造論



被害者：いじめられている子ども
 加害者：いじめている子ども
 観衆：はやし立てたり、面白がって見ている子ども
 傍観者：見て見ぬふりをする

森田洋司『いじめとは何か』(中公新書、2010)

(出典：<https://www.kyousyokuin.or.jp/enjoy/column/class/fukigen/20170419.html>)

「いじめの四層構造」によると、いじめの中心に被害者がいて、内側から、加害者、観衆、傍観者が取り囲んでいる。

昨年、私は、「いじめゼロ子どもサミット 2018」の実行委員になった。「いじめの四層構造」をもとに、劇を作り、被害者、加害者、観衆、傍観者が誰とつながり、どのような行動をとればいいかを話し合った。

例えば、傍観者が被害者に声をかけて一人にならないようにする、傍観者みんなで加害者にやめるように言うなどの意見が出た。

また、四層構造の中にいる人が外側にいる人とつながることも重要だ。教師、保護者、地域の人など、四層構造の外側には広い世界があり、たくさんの人がいる。信頼できる人に相談することも大切だ。

「つながる」ことには勇気がいる。「ちくった。」と言われることや、自分がいじめられることを恐れてしまうかもしれない。でも、勇気を持ってつながれば、「いじめを止めたい。」と思っている他の仲間と協力して、解決へ行動を取ることができる。

だから、つながる勇気を持つこと、「誰と、どうつながるか。」をよく考えて行動することが大切である。

②教師にできること

「大津市中2いじめ自殺事件」では、暴力行為を見た教師が「あんまりやるなよ」と言いながら、ほとんど止めようとしなかった。

「中野富士見中いじめ自殺事件」では、担任を含む4人の教師が、「葬式ごっこ」に加わり追悼の寄せ書きを書いた。

被害者は先生なら、気付いて、助けてくれると思っているかもしれない。それなのに、教師がいじめを見過ごしたり、参加したりしたら、被害者はさらに追い詰められる。

教師は、生徒の小さな変化に気づき、被害者の味方になり守ってほしい。それだけでなく、加害者の声にも耳を傾けていじめがもう一度起らないように、解決してみんなが充実した学校生活を再び送れるようにしてほしい。

3. いじめの起こりにくい環境づくり

①生徒一人一人にできること

私が小6、中3の時に参加した、「いじめゼロ子どもサミット」は、児童・生徒が主体となって、サミットを運営する。私は「いじめをなくしたい」という自分と同じ志をもった人に出会えたことがとても嬉しかった。サミットに参加した後も出会った仲間が心の支えとなり、いじめゼロへの活動に取り組むことができた。

いじめに関する知識を深め、リーダーを養成するこのような取り組みに積極的に参加し、そこで学んだことを広めたり、身の回りでいじめが起こった時に生かしたりすることが大切だと思う。

②クラスや部活動などみんなで取り組めること

2. ①ではいじめが起こったときに「つながる」ことが大切であると書いたが、普段から「つながる」ことを意識すべきである。例えば、普段はあまり話さない人にも挨拶することや、「ありがとう」などの言葉を大切にすることで、いじめが起こったときに、4つの立場の人がつながりやすくなると思う。

最後に、ここまでいじめで苦しむ人を減らすための取り組みを書いてきたが、私には傍観者になった経験が何度もある。苦しんでいる友だちを前に、何もできず、つらかったし、自分に腹が立った。だから、いじめについて学び、自分の行動を振り返りたい、これからへつなげたいと思い、この論文を書いた。

いじめは、いつ、身の回りで起こるか分からない。だから、大人も、子どもも、いじめ問題を他人事ではなく、身近な問題と捉えてほしい。

今、いじめ問題に向き合っている人には、勇気をもって「つながる」ことを大切にしてほしい。いじめを受けている人は、一人で悩まず、信頼できる人に相談してほしい。中心になっていじめをしている人は、取り返しがつかなくなる前に自分自身の行動を客観的に振り返り、やめる勇気を持ってほしい。いじめを面白がって見ている人は、自分もいじめに加わっていることに気付いてほしい。いじめを見て見ぬふりをしている人は、自分の内側にいる人（被害者、加害者、観衆）や外側にいる人（教師や他の友だち）とつながって、解決につながるような行動を取ってほしい。

そして、いじめを受けて自殺する子どもがいなくなしてほしい。いじめで苦しむ子どもが減ってほしい。それが、この論文に込めた私の願いだ。

■参考文献

『ビジュアル版子どもの権利宣言』 シェーン出版社

『思春期のころと身体 Q&A②いじめ』 村瀬学

『尾木ママと考える いじめのない学校といじめっ子にしない子育て』 尾木直樹

文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成 29 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について

<https://www.kyousyokuin.or.jp/enjoy/column/class/fukigen/20170419.html>